



Title	カラチャイ・バルカル語の補助動詞 -(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- の異同に関する比較研究
Author(s)	菅沼, 健太郎; SUGANUMA, Kentaro
Citation	北方言語研究, 14, 37-49
Issue Date	2024-03-20
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/110527">https://doi.org/10.14943/110527</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/92093">https://hdl.handle.net/2115/92093</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_Suganuma.pdf



## カラチャイ・バルカル語の補助動詞 -(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- の 異同に関する比較研究\*

菅 沼 健 太 郎  
(金沢大学)

キーワード：カラチャイ・バルカル語、補助動詞、完了、意図性、意志性

### 1. はじめに

#### 1.1. 本論文の目的

本論文の目的はカラチャイ・バルカル語の補助動詞 -(I)b iy- “lit. ～て送る”、-(I)b kal- “lit. ～て残る”、-(I)b koy- “lit. ～て放置する” を比較し、意味、ならびに共起する主動詞に関する異同を明らかにすることである。

#### 1.2. 対象言語の概要

カラチャイ・バルカル語はチュルク諸語北西語群に属する言語である。同言語は主にロシア連邦内のコーカサス地方に位置するカラチャイ・チェルケス共和国とカバルダ・バルカル共和国で話されている他、トルコ共和国の一部地域でも話されている。本論文の主たるデータは (1a) に示すトルコ共和国出身の言語コンサルタントから得たデータであるが、一部 (1b) に示すコーカサス地方で発行されている新聞から得たデータも用いる。

#### (1) 本論文のデータ

##### a. 言語コンサルタント

母語話者 A 氏：1973 年生まれ、トルコのエスキシェヒル県、エスキシェヒル市出身。

祖父母世代はロシアからトルコに移民したカラチャイ・バルカル語母語話者である。A 氏はカラチャイ・バルカル語とトルコ語のバイリンガルであるが、第一言語はカラチャイ・バルカル語である。A 氏は同言語を親族、および上述の移民とその子孫からなるコミュニティ内での会話で用いている。なお、このように A 氏はトルコ共和国出身であるため例文内にもトルコ語の語彙が現れることがある。

##### b. 新聞テキストデータ

カラチャイ・バルカル語新聞：Кърачай (URL: <https://gazetakarachai.ru/>)、カラチャイ・チェルケス共和国議会より発行される。

---

\* 本論文は文部科学省の卓越研究員事業、科研費（課題番号 21K12980）、および東京外国語大学 AA 研の共同研究課題「チュルク諸語における情報構造と知識管理—音韻・形態統語・意味のインターフェース—」による成果の一部である。本論文執筆にあたり、コメントをくださった全ての方々、母語話者である A 氏、匿名査読者 2 名に深く感謝申し上げます。なお、本論文で形態素表示に用いられる I, A はそれぞれ母音調和によって [i, ü, u, u], [a, e] のいずれかに交替する母音を表す。また -(I)b iy- の (I) のように I に括弧がついている場合があるが、それは別の母音が行先ずる場合にその I が削除されることを意味する。例えば afa- “食べる” に -(I)b iy- が接続する場合、afa-b iy となり、(I) が削除される。

なお、カラチャイ・バルカル語というのはカラチャイ語とバルカル語という2つのチュルク諸語の総称である。これら2言語は差異がありつつも互いに意思疎通が可能であるため、カラチャイ・バルカル語という形でひとまとめにされることが多い。(1a)の母語話者A氏は、自身の言語はバルカル語ではなくカラチャイ語であるという認識をもっている。また、(1b)の新聞データはカラチャイ・チェルケス共和国で発行されておりカラチャイ語新聞というべきものである。そのため本論文は正確にはカラチャイ語について論じるものとなっているが、先行研究に倣い、ここではカラチャイ・バルカル語と呼ぶことにする。

### 1.3. 3つの補助動詞 (-*(I)b iy-*, -*(I)b kal-*, -*(I)b koy-*)

本論文ではカラチャイ・バルカル語の補助動詞を扱う。ここでいう補助動詞とは別の動詞に後続し、その動詞に何らかの意味を付加する文法化した動詞のことを指す<sup>1</sup>。本論文ではこの補助動詞によって意味付加を受けている動詞を主動詞と呼ぶことにする。カラチャイ・バルカル語には補助動詞がいくつか存在するが、ここでは Urusbiev (1963: 105-106) において「非意図的、あるいは予期せぬ動作を意味する補助動詞 (Сложносоставные глаголы, обозначающие произвольные, неожиданные действия) <sup>2</sup>」とされている -*(I)b iy-* “lit. ～て送る”、-*(I)b kal-* “lit. ～て残る”、-*(I)b koy-* “lit. ～て放置する” という3つの補助動詞を扱う。なお、Urusbiev (1963: 105-106) ではこの3つ以外にも、-*(I)b al-* “lit. ～て取る”、-*(I)b dziber-* “lit. ～て送る”、-*(I)b ket-* “lit. ～て去る”、-*(I)b tüf-* “lit. ～て落ちる”、-*(I)b fjuuk-* “lit. ～て出る” という5つの補助動詞も同様の意味を表すとされているが、母語話者A氏はこれらの形式になじみがないとのことだったため、ここでは扱わないことにする<sup>3</sup>。

Urusbiev (1963: 105-106) は本論文で扱う3つの補助動詞について、「予期せぬ非意志的な動作をあらわし、時に瞬時の状態変化を表す」としているが、これらの相違点については触れていない。一方の Takuev (1979: 50-59) はこれらを別個のものとして扱い、-*(I)b iy-* は突然の動作、-*(I)b kal-* は予期せぬ動作、-*(I)b koy-* は完了あるいは非意図的動作を表す、というようにそれぞれに別々の記述を行っている。しかし、それぞれを比較する形での記述ではないため、体系的な共通点と相違点をつかむことができていない。そこで、本論文ではこの

<sup>1</sup> 本論文ではある動詞が文法化し補助動詞となっているかどうかの判断基準として、その動詞が自身の項や修飾要素をもてるか、という判断基準を用いている。もしそういった要素をもてるのであれば、それは元の項構造や語彙的意味を保持している、すなわち文法化していない形式ということになる。その一方でそれらをもてないのであれば、その動詞は本来の項構造を保持しておらず、語彙的意味も完全に、あるいは部分的に失っていることになるため、文法化した形式だということができる。調査時にはこのような基準を用いた判断を行った。例えば、*dʒaz-urb iy-* “書いて送る”や*afā-b kal-* “食べて残る”の場合、“(手紙を)書いてその手紙を送る”や“(ある宿泊先で)食べてその宿泊先で滞在する”のように独自の項や修飾要素をとることが可能である(*kal-*には“残る”だけでなく“滞在する”という意味もある)。このような可能性のあるものは議論から除外した。

<sup>2</sup> 厳密には *Сложносоставные глаголы* は複合動詞と呼ぶべきであるが、Urusbiev (1963) ではこの用語を「語彙的意味をもつ動詞+助動詞」という構造に対して用いているため補助動詞と呼んでも差し支えないと判断できる。

<sup>3</sup> 新聞テキストデータにおいても、これら5つの形式の内、-*(I)b fjuuk-* “lit. ～て出る”以外の4形式は補助動詞として使用されている例が見当たらなかった。-*(I)b fjuuk-* “lit. ～て出る”については、母語話者A氏から、*et-* “する”と共起し動作の完了を表すことはあるものの、*et-* 以外の動詞とは共起しないというコメントがあった。実際、新聞テキストデータにおいても *et-* と共起する例は観察されたが、それ以外の動詞と共起している例は観察されなかった。

3つを比較しそれぞれの意味と形態に関する記述を行う。そして各補助動詞間に (2) に示す共通点と相違点がみられることを示す。

(2) -(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- の共通点と相違点

- a. 共通点：3つ全てが「短時間での完了」を表す。ここでいう「短時間」というのは、以下の2つの内どちらかに該当する概念である。
- ①きわめてわずかな時間、例文では「一瞬」、「さっと」、「さっさと」などの言葉で表現することにする。
  - ②文脈上の予想よりも短い時間、これには10秒という予測がある中での1秒のように結果として①に該当するものもあるが、2か月という予測がある中での1か月のように①とは呼べないものも含まれる<sup>4</sup>。
- b. 相違点：共起可能な主動詞の種類と「短時間での完了」の様態
- (I)b iy-：意志動詞（ただし他動詞の場合は他動性が高いものに限られる）と共起し、その動作が非意図的に短時間で完了したことを表す。≒知らずに～した。
  - (I)b kal-：無意志自動詞、および文脈上無意志的に行われている動作を表す動詞（現時点で確認できるのは主語が無生物である動作、および自然な学習としての üren- “学ぶ” の2つ）と共起し、その動作が短時間で完了したことを表す。≒自然と～した。
  - (I)b koy-：他動詞（意志的なもの、無意志的なもの含む）、および意志的な自動詞と共起し、その動作が短時間で完了したことを表す（非意図的に完了したかどうかは主動詞の意味や文脈によって異なる）。≒わざと、あるいは知らずに～した。

次節以降、これらの共通点と相違点について述べていく。

2. 共通点：短時間での完了

ここではどのような副詞が3つの補助動詞と共起できるかを示すことを通して、3つの補助動詞が短時間での完了という意味をもつことを示す。まず、これら3つの補助動詞は全て (3) に示すように、haman “すぐ” とは共起できるが akurttun “ゆっくり” とは共起できないという特徴がある。これを考慮すると、これら3つの補助動詞は動作が短時間で行われることを表すと考えることができる。

- (3) a. {<sup>ok</sup>haman/\*akurttun} afa-b iy-di-m.  
 すぐ／ゆっくり 食べる-CVB 送る.AUX-PST-1SG  
 “{<sup>ok</sup>すぐ/\*ゆっくり} 食べた。”

<sup>4</sup> ここで言う「文脈上の予想」は基本的に「話者の予想」であるが、「話者の予想ではないが、話し手と聞き手との間で共有された予想」というものも含まれる。例えば、3.2節の (13b) “君は（たった）3か月で（自然と）学ぶ（学んでしまう）よ。” というのは、話し手はそうは思っていないが、聞き手（君）は学ぶのに時間がかかるのではと思っており、そのような考えが話し手と聞き手の間で共有されている時に発話することが可能である。

- b. {<sup>ok</sup>haman/\*akurtun} dzukla-b kal-du-m.  
 すぐ／ゆっくり 入眠する-CVB 残る.AUX-PST-1SG  
 “{<sup>ok</sup>すぐ／\*ゆっくり} 入眠した。”
- c. {<sup>ok</sup>haman/\*akurtun} afa-b koy-du-m.  
 すぐ／ゆっくり 食べる-CVB 放置する.AUX-PST-1SG  
 “{<sup>ok</sup>すぐ／\*ゆっくり} 食べた。”

また、これら3つの補助動詞は全て(4)に示すように、「10分で」のように動作完了までの所要時間を表す表現とは共起できる一方で、(5)に示すように「10分間」のように動作継続時間を表す表現とは共起できない。これはこの3つの補助動詞が完了というアスペクトの意味を付加し、継続という別のアスペクトの意味とは馴染まないためだと考えられる。なお、先の(3)ではこの3つの補助動詞に短時間という意味が含まれることをみた。(4)の「10分で」のような所要時間を表す表現と共起した場合も、やはりその所要時間が予想よりも短い時間であるという意味が生じる。(4)の訳文ではその意味で(たった)を付加した。

(4) 動作完了時間表現(下線部)+3つの補助動詞:文法的

- a. eki ayluk harfluk-um-u bir ay-da dʒoy-ub iy-di-m.  
 2 月分 給料-1SG.POSS-ACC 1 月-LOC 使う-CVB 送る.AUX-PST-1SG  
 “私は2か月分の給料を(たった)ひと月で使った。”
- b. bu darman-nu iʃ-gen-im-de on takiyka-da  
 この薬-ACC 飲む-NML-1SG.POSS-LOC 10 分-LOC  
 dzukla-b kal-du-m.  
 入眠する-CVB 残る.AUX-PST-1SG  
 “この薬を飲んだところ、私は(たった)10分で入眠した。”
- c. ullu tabak-nu on takiyka-da afa-b koy-du-m.  
 大きい 皿-ACC 10 分-LOC 食べる-CVB 放置する.AUX-PST-1SG  
 “私は大皿(の料理)を(たった)10分で食べた。”

(5) 動作継続時間表現(下線部)+3つの補助動詞:非文法的

- a. \*uʃ takiyka afa-b iy-di-m.  
 3 分 食べる-CVB 送る.AUX-PST-1SG  
 “私は3分間食べた。”
- b. \*on takiyka dzukla-b kal-du-m.  
 10 分 入眠する-CVB 残る.AUX-PST-1SG  
 “私は10分間入眠した。”
- c. \*on takiyka afa-b koy-du-m.  
 10 分 食べる-CVB 放置する.AUX-PST-1SG  
 “私は10分間食べた。”

なお、(3) から (5) では全ての例を過去形で統一しているが、他の時制、例えば非過去形にしても文法性判断は変化しない。非過去形の場合、(3) の *haman* “すぐ” と共起した文や (4) などの文法的な文は例えば「よくすぐに食べる」、「大抵 (たった) 10 分で入眠する」のような性質の解釈になる。

このように、“ゆっくり” とは共起できないが “すぐ” とは共起できる点、動作継続時間表現とは共起できないが動作完了時間表現とは共起できる点、さらに動作完了時間表現と共起した場合にはその時間が予想よりも短い時間であるという意味がある点から、この 3 形式は短時間で完了を表すと考えられる<sup>5</sup>。

### 3. 相違点に着目した各補助動詞の用法の記述

#### 3.1. -(I)b iy- “lit. ～て送る”

-(I)b iy- は以下の (6a) に示す生理現象や心理現象を表す自動詞とは共起できない。宮島 (1972: 424-425) の日本語の動詞分類を適用すれば (6a) は無意志動詞とまとめられる。一方で -(I)b iy- が共起できる動詞には (7) に示すような自動詞や他動詞がある。これらは主体の制御の下実現する動作を表すと考えられ、(6a) と対比すれば意志動詞とまとめられる。ただし、意志動詞であっても、(6b, i) の知識動詞のように目的語に直接変化を与えない動詞、すなわち他動性が低い動詞は -(I)b iy- とは共起できない。(6b, i) の知識動詞以外にも、-(I)b iy- と共起できない他動詞には (6b, ii-iv) のようなものがあり、これらは (6b, i) を含め他動性が低いという点が共通している。これを考慮すれば、「-(I)b iy- と共起できるのは意志動詞に限られ、かつ他動詞の場合は他動性が高いものに限られる」とまとめることができる。

#### (6) -(I)b iy- と共起できない動詞

- a. 生理現象や心理現象を表す自動詞 (無意志動詞)<sup>6</sup>: *džukla-* “入眠する”、*öl-* “死ぬ”、*terle-* “汗をかく”、*ilgen-* “恐れる”
- b. 他動性が低い他動詞<sup>7</sup>
  - i. 知識動詞: *bil-* “知る”、*üren-* “学ぶ、覚える”
  - ii. 再帰的動詞: *kiy-* “着る”、*kesi butun suundur-* “自分の足を折る”
  - iii. (知識動詞以外の) 目的語に直接変化を与えない動詞: *tab-* “見つける”
  - iv. 無意志的に行われる動詞: *unut-* “忘れる”、*tas et-* “なくす”

<sup>5</sup> カラチャイ・バルカル語と同じくチュルク諸語北西語群に属するカザフ語やキルギス語においても、-(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- に対応する表現は (「短時間で完了」とは述べられていないものの、) 突然さや素早さ、完了に関連する意味をもつとされている (カザフ語: Muhamedowa (2016: 103-111, 137-140)、キルギス語: 大崎・ナズグリ (2018)、アクマタリエフ (2021) 等)。なお、母語話者 A 氏によれば、カラチャイ・バルカル語のこれら 3 つの補助動詞は -(I)b iy-ib kal- のように組み合わせて用いることはできないとのことであった。

<sup>6</sup> *ilgen-* “恐れる” の目的語は対格でなく奪格でマークされる。

<sup>7</sup> Hopper and Thompson (1980) の他動性の尺度に基づけば、(6b, i, iii) は *affectedness of object* (対象の受ける影響) が少ない点で他動性が低いと言える。また、ii. は再帰的であり *participants* (2 つ以上の参加者がいれば他動性が高く、1 つの参加者だけであれば他動性が低い) の尺度から他動性が低いといえる。なお、*kiy-* “着る” は目的語である衣服の着点が必要動作主自身である点から再帰的と考えることができる (動作主以外が着点の場合は “着せる” になる)。最後に iv. は *volitionality* (意志をもって行うなら他動性が高い、無意志的であれば低い) という尺度から他動性が低いことになる。

(7) -(I)b iy- と共起できる動詞<sup>8</sup>

- a. 自動詞 : d̥ürü- “歩く”、kuɟur- “叫ぶ”、tepsə- “踊る”、kir- “入る”  
b. 他動詞 : buz- “壊す”、öltür- “殺す”、sundur- “折る、割る”、ayt- “言う”、oku- “読む”、  
aɟa- “食べる”、iɟ- “飲む”

次に意味について述べると、-(I)b iy- は以下に示すように不注意や間違いによりその行為をしてしまった、という過失の意味をもたらす。

(8) a. küflü                      gurd̥zun-nuu aɟa-b                      iy-di-m.

カビの生えた    パン-ACC    食べる-CVB    送る.AUX-PST-1SG

“(よく確認せずに、しらなくて) 私はカビの生えたパンをさっと食べた。”

b. suw de-b                      araku-nuu iɟ-ib                      iy-gen=di.

水    言う-CVB    酒-ACC    飲む-CVB    送る.AUX-PERF=3

“彼(彼女)は水だと思ってお酒をさっと飲んだそうだ。”

また、先述の (4a) “私は2か月分の給料を(たった)ひと月で使った。”もひと月で使うつもりはなかったが、間違えて使ってしまった、という過失の意味がある。

これらの例を踏まえると、-(I)b iy- は本来は主体の制御の下実現する行為が非意図的(=主体が望んでいないにも関わらず) 実現することを表すと考えられる。これに関連して、-(I)b iy- は (9a) に示すように意向形接尾辞 -AyIm と共起できない。これは -(I)b iy- による「非意図的(望んでいない)」という意味と、意向形のもつ「その行為の実現を望む」という意味が相反する性質をもつためだと説明できる。なお、3.3節で再度述べるが、(9b) に示すように -(I)b iy- ではなく -(I)b koy- は意向形にでき、この点で -(I)b iy- と -(I)b koy- の違いを観察することができる。

(9) a. \*tambla Ankara-ɾa                      ket-erik=me                      anuu üɟün

明日    アンカラ-DAT    出発する-FUT=1SG    その    ため

bu    gurd̥zun-nuu aɟa-b                      iy-eyim.

この    パン-ACC    食べる-CVB    送る.AUX-1SG.VOL

“明日アンカラに行くから、このパンをさっさと食べ {よ/てしまお} う。”

<sup>8</sup> ayt- “言う” や oku- “読む” は目的語に直接変化を与えるわけではない点で他動性が低いといえる。しかし、“言う” は“着る” と異なり、目的語(発話内容など)の着点が聞き手という動作主以外である点で外部に影響を与えていると考えることができる。また、“読む” は üren- “学ぶ、覚える” と同様何らかの知識が動作主に入ることになるが、“学ぶ、覚える” は“自然と覚えた” のように無意志的な解釈が可能な一方、“読む” はそのような解釈が難しい点で異なるといえる。

b. tambla Ankara-*va* ket-erik=*me* anu üfün  
 明日 アンカラ-DAT 出発する-FUT=1SG その ため  
 bu gurdğun-nu afa-b koy-ayum.  
 この パン-ACC 食べる-CVB 放置する.AUX-1SG.VOL  
 “明日アンカラに行くから、このパンをさっさと食べ {よ／てしまお} う。”

これらを踏まえると -(I)b iy- の機能は以下のようにまとめることができる。

- (10) -(I)b iy- : 意志動詞（ただし他動詞の場合は他動性が高いものに限られる）と共起し、その動作が非意図的に短時間で完了したことを表す。

加えて、新聞テキストデータにおいても、-(I)b iy- が (10) の機能をもつことを示すデータが得られたため、以下に示す。こちらでは *esle-me-y* “気づかずに” という副動詞と共起しており、やはり過失が関わる文脈で用いられていることがわかる。

- (11) karatefî, esle-me-y, tabsuz ur-ub iy-se,  
 空手家 気づく-NEG-CVB 悪く 殴る-CVB 送る.AUX-COND  
 adam-nu öltür-ürge bol-luk=*du*.  
 人-ACC 殺す-INF なる-FUT=3  
 “空手家は気付かずに悪い形で殴ると人を一瞬で殺しかねない。”

### 3.2. -(I)b kal- “lit. ～て残る”

先の -(I)b iy- と異なり、-(I)b kal- は (6a) に示した無意志動詞と共起する。

- (12) = (6a) -(I)b kal- と共起できる動詞  
 dğukla- “入眠する”、öl- “死ぬ”、terle- “汗をかく”、ilgen- “恐れる”

-(I)b kal- は (7) に示したような意志動詞とは基本的に共起しない。ただし、主語が無生物、すなわち主語が無意志的なものである場合には共起できる ((13a))。また、(6b) の他動詞とも基本的に共起しないが、調査の限りでは知識動詞の *üren-* “学ぶ、覚える” だけは (13b) のように文脈上話し手が無意志的に学んでいると解釈される場合には共起することができる<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> カラチャイ・バルカル語の *bil-* “知る” は “気づく” の意味もあり、無意志的な知覚を意味しうるが、母語話者 A 氏によれば *bil-* は -(I)b kal- とは共起できないとのことだった。また、*unut-* “忘れる” や *tas et-* “なくす” も本来的に無意志的動作であるが -(I)b kal- とは共起できないとのことだった。“気づく”、“忘れる”、“なくす” は瞬間的な動作である一方、“学ぶ、覚える” は一定時間継続する動作を表す点で異なる。Hopper and Thompson (1980) の他動性の尺度には *punctuality* (瞬間的な動作の方がより他動性が高い) というものがあり、この点からすると “学ぶ、覚える” は “気づく”、“忘れる”、“なくす” に比して他動性が低いと言え、この点が -(I)b kal- との共起の可否に関連している可能性がある。

- (13) a. dʒel-de top teʃik-ge kir-ib kal-duu.  
 風-LOC ボール 穴-DAT 入る-CVB 残る.AUX-PST  
 “風で(=風に吹かれて)ボールが穴にさっと入った。”
- b. üñf ay-da üren-ib kal-luk=sa.  
 3 月-LOC 学ぶ-CVB 残る.AUX-FUT=2SG  
 “君は(たった)3か月で(自然と)学ぶ(学んでしまう)よ。”

意味について述べると、母語話者の感覚によれば、「何かが自然とそうになった」という場合に用いられることが多いとのことであった。実際、先述の知識動詞 *üren-* “学ぶ” は **-(I)b kal-** だけでなく後述の **-(I)b koy-** と共起できるが、**-(I)b kal-** と共起した場合は無意志的、すなわち「自然と習得した」という意味があり ((14a))、**-(I)b koy-** の方は「何らかの工夫がなされた結果習得した」という意味があるという ((14b))。

- (14) a. eki ay-da inglizdʒe-ni üren-ib kal-duu.  
 2 月-LOC 英語-ACC 学ぶ-CVB 残る.AUX-PST  
 “(たった)2か月で英語を(自然と)学んだ。”
- b. eki ay-da inglizdʒe-ni üren-ib koy-du.  
 2 月-LOC 英語-ACC 学ぶ-CVB 放置する.AUX-PST  
 “(たった)2か月で英語を(学校に行くなどして)学んだ。”

これらを踏まえると **-(I)b kal-** の機能は以下のようにまとめることができる。

- (15) **-(I)b kal-** : 無意志自動詞、および文脈上無意志的に行われている動作を表す動詞(現時点で確認できるのは主語が無生物である動作、および自然な学習としての *üren-* “学ぶ” の2つ) と共起し、その動作が短時間で完了したことを表す。

なお、「自然とそうになった」という無意志的の意味は **-(I)b kal-** と共起できる動詞それ自体がそのような意味解釈を語彙的、文脈的にもっているため生じていると考えられるが、そうではなく、**-(I)b kal-** が主動詞にそのような意味を付加している可能性もある。この点については今後検討する必要があるが、本論文では現時点での解釈として **-(I)b kal-** はそのような意味付加は行っていないと考える。仮に **-(I)b kal-** がそのような意味付加を行っているとするれば、**-(I)b kal-** は (16) に示すように様々な意志動詞と結びつきそれが無意志的に完了したことを表すことができるはずである。しかし、これらは母語話者 A 氏によれば非文とのことであった。

- (16) a. \*süy-gen dʒuur-nuu eʃit-ib tepse-b kal-duu.  
 愛する-NML 歌-ACC 聞く-CVB 踊る-CVB 残る.AUX-PST  
 (意図した読み) “お気に入りの音楽を聞いて(体が自然と動いて)さっと踊った。”

b. \*bir torba tʃekirdek aʃa-b kal-duu-m.

1 袋 種 (ナッツ) 食べる-CVB 残る.AUX-PST-1SG

(意図した読み) “(無意識のうちに手が止まらず) ナッツを一瞬で一袋食べた。”

これらが非文となる理由として、これらの主動詞が母語話者 A 氏にとっては、(文脈を設定したとしても) 容易に無意志動詞と解釈することができなかつたためだというのが考えられる。仮にこのような理由から非文になったとすると、-(I)b kal- 自体には無意志の意味を付加する力はなく、「語彙的、あるいは文脈的に容易に無意志的動作と解釈できる動詞とのみ共起する」という選択制限が -(I)b kal- にはあると考えられる。このような考察から現時点では -(I)b kal- は無意志的完了という意味付加は行っていないと考えている。

### 3.3. -(I)b koy- “lit. ～て放置する”

-(I)b koy- は (6a) の無意志動詞とは共起せず、それ以外、すなわち (6b) の他動性が低い他動詞、および (7) の自他含む意志動詞全般と共起可能である。ここでここまでみてきた3つの補助動詞がどのような動詞と共起するかをまとめると、以下のようになる。この表では共起できない動詞については\*だけでなく、濃い灰色を当該の欄に施した。また一部共起できるものがある場合には薄い灰色を施した。

(17)

主動詞		補助動詞	-(I)b iy-	-(I)b kal-	-(I)b koy-
自動詞	無意志 ((6a))		*	ok	*
	意志 ((7a))		ok	*、ただし無意志的解釈の場合は ok (cf. (13))	ok
		他動性			
他動詞	無意志	低い <sup>10</sup> ((6b, iv))	*	*	ok
	意志	低い ((6b, i-iii))	*	*、ただし自然な学習としての üren- “学ぶ、覚える” は ok (cf. (14))	ok
		高い ((7b))	ok	*	ok

(7) の動詞と特に制限なく共起できる点で、-(I)b koy- は -(I)b iy- に類似するが、相違点として -(I)b koy- は意向形接尾辞 -AyIm と共起できる点が挙げられる。(9a) でも見たように、-(I)b iy- は -AyIm と共起できないため、ここに -(I)b iy- と -(I)b koy- の違いが見て取れる。(9b) で示したように -(I)b koy- は意志形にすることで「今のうちに～してしまおう、

<sup>10</sup> Hopper and Thompson (1980) の他動性の尺度の1つである volitionality (意志をもって行うなら他動性が高い、無意志的であれば低い) に基づけば無意志的他動詞は自ずと他動性が低いことになる。ゆえに他動性が高い無意志他動詞は存在しないと判断し、表にも欄を設けないことにした。

しておこう」のように意図的に(=その動作の実現を主体が望む形で)その動作を短時間で完了させることを表すことができる。加えて、(18b)のように -(I)b iy- を -(I)b koy- に置換するとやはり意図的な解釈になる。

- (18) a. küflü                    gurdžun-nu    afa-b            iy-di-m.            = (8a)  
           カビの生えた    パン-ACC        食べる-CVB    送る.AUX-PST-1SG  
           “(よく確認せずに、知らないで)カビの生えたパンをさっと食べた。”
- b. küflü                    gurdžun-nu    afa-b            koy-du-m.  
           カビの生えた    パン-ACC        食べる-CVB    放置する.AUX-PST-1SG  
           “(食べ物がないため、ほかにやりようがないので)カビの生えたパンをさっと食べた。”

しかし、動詞によっては -(I)b iy- 同様非意図的な意味にもなりえる。現時点ではそのような動詞には、(19a): 動詞本来の意味として、元からその行為の実現が望ましくないもの、(19b): 他動性が低いもの (= (6b) の一部)、の2種類があるようである。

- (19) -(I)b koy- と共起した際非意図的な意味をもつ、あるいはもちうる動詞
- a. 動詞本来の意味として、その行為の実現が望ましくないもの: buz- “機械類を壊す”、sundur- “割る”、kanat- “出血させる”
- b. 他動性が低い他動詞 = (6b) の一部<sup>11</sup>
- ・ 知識動詞: bil- “知る”
  - ・ 再帰的動詞: kiy- “着る”、kesi butun sundur- “自分の足を折る”
  - ・ 無意志的に行われる動詞: unut- “忘れる”、tas et- “なくす”

(19a) については、本来これらの動詞は望ましくないというニュアンスを含むことから非意図的なニュアンスが生じていると考えられる。(19b) については (6) に示したように -(I)b iy- は他動性が低い動詞とは共起できないため、そのような動詞の場合は -(I)b koy- が用いられ、非意図的動作を表すのだと考えられる。ただし、必ず非意図的な意味になるというわけではなく、一部の動詞は文脈に応じて意図的かそうでないかが変化しうる。例えば kiy- “着る” や sundur- “割る” は -(I)b koy- と共起した場合、「着てはいけない服をささっと着た(着てしまった)」、「大切なお皿を一瞬のうちに割った(割ってしまった)」という非意図的な解釈も可能であるが、「和服のように着るのに時間がかかるものを短時間で着た」、「肉屋が短時間で肉の骨をたたき割った」といった意図的な解釈も可能である<sup>12</sup>。

<sup>11</sup> (6b) のうち、üren- “学ぶ、覚える”、tab- “見つける” は非意図的な意味は生じないとのことであった。また、(19b) の kesi butun sundur- “自分の足を折る”、unut- “忘れる”、tas et- “なくす” は (19a) にも該当する。

<sup>12</sup> 査読者より「短時間(査読の段階では「素早い」と表現していた)」という概念と「非意図的」という概念は相性が悪いのではないかという指摘をいただいた。この点については今後検討したいと考えているが、非意図的な完了における短時間というのは純粋な所要時間という意味だけでなく、「忠告する暇もなく動作が行われた」という特別な意味が加わっていると考えられるべきかもしれない。

-(I)b koy- が (18b) のように意図的な動作を表し、かつ (19) の動詞と共起した場合には非意図的な動作も表しうることを考えると、-(I)b koy- は積極的に意図性に関する意味付加をする役割はもっておらず、意図性、非意図性は主動詞の意味や文脈に依存すると考えられる。また、(19b) の unut- “忘れる” のような無意志的他動詞も -(I)b koy- と共起できることを踏まえると、-(I)b koy- の役割は以下のようにまとめられる。

(20) -(I)b koy- : 他動詞 (意志的なもの、無意志的なもの含む)、および意志的な自動詞と共起し、その動作が短時間で完了したことを表す (非意図的に完了したかどうかは主動詞の意味や文脈によって異なる)。

#### 4. まとめ

本論文ではカラチャイ・バルカル語の補助動詞 -(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- の比較を行い、これらの補助動詞間に以下に示す共通点と相違点がみられることを示した。

(21) = (2)-(I)b iy-, -(I)b kal-, -(I)b koy- の共通点と相違点

- a. 共通点 : 3つ全てが「短時間での完了」を表す。ここでいう「短時間」というのは、以下の2つの内どちらかに該当する概念である。
- ①きわめてわずかな時間
  - ②文脈上の予想よりも短い時間
- b. 相違点 : 共起可能な主動詞の種類と「短時間での完了」の様態
- (I)b iy- : 意志動詞 (ただし他動詞の場合は他動性が高いものに限られる) と共起し、その動作が非意図的に短時間で完了したことを表す。≒知らずに~した。
  - (I)b kal- : 無意志自動詞、および文脈上無意志的に行われている動作を表す動詞 (現時点で確認できるのは主語が無生物である動作、および自然な学習としての üren- “学ぶ” の2つ) と共起し、その動作が短時間で完了したことを表す。≒自然と~した。
  - (I)b koy- : 他動詞 (意志的なもの、無意志的なもの含む)、および意志的な自動詞と共起し、その動作が短時間で完了したことを表す (非意図的に完了したかどうかは主動詞の意味や文脈によって異なる)。≒わざと、あるいは知らずに~した。

ひとまずはこのように異同を整理することができたが、今後はその精緻化に加え、他のチュルク諸語との異同を捉えたチュルク諸語間の比較研究に発展させていきたいと考えている。

#### 略記一覧

- : 接辞境界、= : 接語境界、1 : 1 人称、2 : 2 人称、3 : 3 人称、ACC : 対格、AUX : 補助動詞、COND : 条件、CVB : 副動詞、DAT : 与格、FUT : 未来、INF : 不定、LOC : 位格、NEG : 否定、NML : 名詞化、PERF : 完了、POSS : 所有、PST : 過去、SG : 単数、VOL : 意向

## 参考文献

- Baskakov, Nikolai Aleksandrovich et al. (1966) *Qarachay-Malkar tilni grammatikasy* [The grammar of Karačay-Balkar]. Nal'chik: Qarachay-Malkar kitap basma.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse, *Language* 56 (2): 251-299.
- Muhamedowa, Raihan (2016) *Kazakh: a comprehensive grammar*. Oxon: Routledge.
- Tekuev, Mussa (1979) *O glagol'nom slovoslozhenii v karachaevo-balkarskom yazyke* [On verb compounding in Karachay-Balkar]. Nal'chik: Knizhnoe izdatel'stovo.
- Urusbiev, Ibragim (1963) *Spryazhenie glagola v karachaevo-balkarskom yazyke* [Verb conjugation in Karachay-Balkar]. Cherkessk: Karachaevo-cherkesskoe knizhnoe izdatel'stovo.
- アクマタリエワ ジャクシルク (2021) 「キルギス語とアルタイ語の補助動詞 iy- / jiber- の出現についての調査と考察」 『北方言語研究』 11: 233-248.
- 大崎紀子・シャミシエワ ナズグリ (2018) 「キルギス語の補助動詞 kal-の意味と本質 —アスペクトと共起制限をめぐる二つの疑問—」 林徹 他 (編) 『Diversity and Dynamics of Eurasian Languages The 20th Commemorative Volume ユーラシア諸言語の多様性と動態 —20 号記念号—』 345-362.
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』 東京：秀英出版.

## A Contrastive Study on the Auxiliary Verbs *-(I)b iy-*, *-(I)b kal-*, and *-(I)b koy-* in Karachay-Balkar

Kentaro SUGANUMA  
(Kanazawa University)

Keywords: Karachay-Balkar, auxiliary verb, completion, intentionality, volitionality

Karachay-Balkar is a Northwestern Turkic language that is mainly spoken in the Karachay-Cherkess Republic and the Kabardino-Balkarian Republic in Russia. It is also spoken in some places in Turkey (e.g., Eskişehir) by immigrants from Russia and their descendants.

Karachay-Balkar has auxiliary verbs, and this paper conducts contrastive research on auxiliary verbs among *-(I)b iy-* “lit. converb + to send,” *-(I)b kal-* “lit. converb + to stay” and *-(I)b koy-* “lit. converb + to abandon.” Urusbiev (1963) reports that these auxiliaries denote involuntary and unexpected actions. However, the differences among these are not discussed much. Tekuev (1979) described these three auxiliaries differently, but he does not describe them from a comparative perspective and thus does not provide a systematic description.

This paper systematically describes the similarities and differences of these auxiliaries and indicates that their main functions are as follows.

- a. *-(I)b iy-*: Co-occurs with a volitional verb (transitive verbs are limited to those that have high transitivity) to indicate that the action was completed involuntarily and in a short period of time. (Since it denotes an involuntary action, this construction cannot be used in the volitional form.)
- b. *-(I)b kal-*: Mainly co-occurs with a non-volitional intransitive verb to indicate that the action was completed in a short period of time.
- c. *-(I)b koy-*: Co-occurs with a transitive verb and volitional intransitive verb to indicate that the action was completed in a short period of time. (Unlike *-(I)b iy-*, *-(I)b koy-* can denote a voluntary action, so it can be used in the volitional form, and whether *-(I)b koy-* denotes an involuntary action or not depends on the lexical meanings of the main verb and the context.)

(すがぬま・けんたろう suganumak@staff.kanazawa-u.ac.jp)